

安全な街づくりに参画する

「南海トラフ巨大地震」や「山崎断層帯地震」など、自然災害による被害を最小限に抑えるためには、国や県、市町の対応（公助）に加え、自分たちの住む地域をフィールドワークなどにより調査し、地域の課題を発見し、解決方法を考えることが必要です。

災害に備え、被害を軽減するために、公助を生かすための高校生ができる共助の取り組みについて学んでいきましょう。

防災マップの配布

県立淡路高等学校

～聞き取りを通して地域の課題を明らかにする取り組み～

県立淡路高等学校・社会研究部では、防災マップ（通称：としまっぷ）を地元の住民の方々と共に作ることで、自分たちだけでなく地元の方々にも防災について考える機会をもってほしいと考え、取り組みました。

1 現地調査

住民からの聞き取りをもとに、自分たちの足で町を歩き、消火栓や消火ホースの場所、危険箇所などを調べ、避難経路の確認とその距離を測定。



2 防災マップの作成

(1) 住民との意見交換会を実施

「危険な場所」や「注意が必要な場所」「過去の災害で被害があった場所」などの聞き取り。

(2) 住民層の把握

地図上に色分けをして住民層を把握。

- (例) ・75歳以上のいる世帯…●(緑) ・要介助を必要とする人がいる世帯…●(赤)
 ・消防団員がいる世帯…●(青) ・小学生以下の子どもがいる世帯…●(黄)

※「世帯名を書いてほしい」という地域住民の要望で、地図上に各世帯の名前を書き込み、誰がどこに住んでいるのかを明示。

(3) 避難経路の設定

各地区から公園や避難所までの距離を測定し、世帯ごとに避難場所や避難経路を設定。

(4) 検証

「としまっぷ」製作後、地震発生を想定し、実際に避難経路通りに行動し、そこで考えられる問題点を確認。

3 地域への配布

検証を終えた「としまっぷ」を各世帯に配布。地域の防災訓練での活用に向けて、より地域のニーズに合うようにマップを改良。



避難経路を提言

県立家島高等学校

～測量データを使って避難経路の課題を明らかにする取り組み～

家島は、多くの家屋が沿岸部にあり、津波のときは、高台にある県立家島高等学校が避難場所となります。しかし、島の道路は狭いため、避難路として適切とは言えません。また、島には高齢者など、災害時に支援が必要な方が多く、地震が発生した場合、高齢者が迅速かつ安全に避難できるかどうか課題となります。

県立家島高等学校は、地域の避難所として避難経路の特徴を考えるため、宮地区津波対策協議会、日本工科大学と連携して高校周辺の測量調査を実施しました。そして、測量データを基にしてジオラマを作成、4つの避難ルートを設定し、高齢者が多いこの地域においてどの避難ルートが迅速かつ安全な避難ルートとなり得るかを考えました。そして、その結果を行政への提言としてまとめました。

1 現地調査

- 高校を基点として測量機器を使い、距離、高低差、角度を測定。
- 調査結果を以下の4点で考察
 - 路面状況（段差の有無、グレーチング箇所におけるの車いすやベビーカーの使用可否）
 - 街灯の有無（夜間の避難の可否）
 - 幅員（車両避難の可否）
 - 断面傾斜（車いすでの避難の可否、病弱歩行者の避難の可否）



2 ジオラマの作成

測量結果を基にジオラマを作成し、地形や道路を立体的に示すことで、住民の方たちにハザードをわかりやすく提示。



3 提言

車いすでの避難が必要な場合に、生徒自身がどのような支援ができるかを考えるとともに、現地調査の結果から、道幅・路面状況・傾斜などをグラフや写真にまとめ、安全な避難経路を見つけ出し、姫路市に提言。



安全で安心な街づくりは地域の人々の願いであり、高校生が地域の課題を見つけ、解決していくことは高校生自身の防災意識を高めるとともに地域の方々に喜ばれる取り組みにつながります。

地域の災害特性を知り、支援者の視点に立って安全で安心な街づくりに参画する行動を起こしていくことが大切です。